

天草土人形

あまくさどろにんぎょう



「山姥と金時」



天草土人形の始まりは、享保2年（1717年）初代・広田和平が、本町の東向寺の参道で茶店を開き、その傍ら仏像を作り、それからいろいろな土人形を作るようになったのが始まりといわれています。

型に粘土を入れ、貼り合わせて人形を成型し、素焼きをした後に絵付けをするという工程で制作します。人形の型は100種類ほどありますが、中でも山姥(やまんば)と金時(子どもを抱きかかえている女性)は、天草島原の乱後、キリシタン弾圧の時代には、隠れキリシタンに信仰されたといわれています。(聖母マリア像の代わりとして)

この土人形は、広田家で7代にわたって制作されました。戦後に廃業され、途絶えていましたが、江戸時代から続いた地元の伝統工芸を絶やすのはもったいないということで、地元の有志の方々が中心となり『天草土人形保存会』を立ち上げ、令和4年度に熊本県伝統工芸品に指定されました。

土で作られており、子供が人形で遊んだあとは壊されていたので、古い時代の保存状態のよい土人形はほとんど残っておらず、とても貴重です。